

se mettre à inf. で表す開始アスペクト

佐々木 幸太

(関西学院大学大学院研究員)

本発表では、フランス語の開始アスペクトマーカに関する研究の一環として *se mettre à inf.* (M) と *commencer à inf.* (C) を取りあげる。多くの実例の観察から、M と C では頻繁に共起する動詞が異なると言える。たとえば、*rire* や *pleurer* など感情の表出を表す動詞は M に用いる傾向が見られ、*être* や *avoir* など状態動詞は C に用いる傾向が見られる。

M と C の意味的差異について、従来の研究では話し手が想定していない行為開始には M を用いると説明することがあった。しかし、話し手が行為開始を想定している場面でも M を用いることがあるので、そのような説明は妥当だとは言えない。

- (1) (薬を作るための熱水を用意していて) L'eau *se mit* enfin à *bouillir*. Ayla versa au creux de sa paume une petite quantité de feuilles séchées de digitale, en aspergea la surface de l'eau. (Auel, J.M., 1985, *Les enfants de la Terre*)

本発表では、まず *mettre* が名詞句や動詞句を従える発話例を観察して、M が行為開始を表す仕組みを明らかにする。次に、実例の観察を通して、M と頻繁に共起する動詞と C と頻繁に用いる動詞を比較する。そして、話し手が行為の展開を意識するか否かが M と C の使い分けの鍵であることを明らかにする。